



Title	カラホト出土蒙漢合壁税糧納入簿断簡
Author(s)	松井, 太
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 1997, 31, p. 25-49
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48088
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

カラホト出土蒙漢合璧税糧納入簿断簡

松井 太

はじめに

中国内蒙古自治区アラ善盟額濟納旗^{アラシャン エチナ}に位置するカラホト(Qara-qota / 黒城～黒水城)は、西夏時代の威福軍、モンゴル時代の亦集乃路^{エチナ}総管府の遺址である。この遺址からは、今世紀初頭以来の各国の探検隊による調査・発掘の結果、13～14世紀のモンゴル時代に属する出土文献が将来されている。モンゴル時代史研究の根本史料が、『集史(Jāmi' al-Tavāriḥ)』をはじめとするペルシア語史料群と、『元史』その他の漢文史料群の、二大編纂史料群であることはいうまでもない。しかしながら、地理的にイラン・中国の中間に位置している河西地方に関する情報は、これらの編纂史料には乏しい。この点でカラホト出土文献は、モンゴル支配下の河西地方の政治・軍事・社会・経済を歴史学的に研究する上で、編纂史料からは窺えない情報を提供するものであり、きわめて重要な価値を有する。

さて、これまで主に知られていたカラホト出土文献は、1907～1909年にかけてのロシアのП.К. Козлов 隊、および1914年のイギリスのM.A. Stein 隊によって将来されたものである。しかし、この両コレクションをはるかに上回る量の、モンゴル時代に年代比定される漢語・非漢語文献が、1983～1984年の中国内蒙古文物考古研究所・アラ善盟文物工作站による発掘調査によって新たに発見された。そのうち、極小断片を除く漢文文献760件余りを現代中国簡体字で移録し、さらに191件には写真複製を付して発表公刊した資料集が、『黒城出土文書(漢文文書巻)』(以下HCWと略記)である。

このHCWは専ら漢文文献を収録したものであるが、実はその中には、ウイグル(Uighur)文字・パクパ(パスパ, 'Phags-pa)字モンゴル文との合璧文書も存在する¹⁾。本稿で分析の対象とするのもその中の1件である。問題の文書は、HCW[p.110]においてF214:W1との文書番号が与えられて漢文4行が移録されているが、同時に発表された写真複製(図版拾柒(1))から、ウイグル文字モンゴル文が記されていることが判明する。そこで本稿では、まず第1節で、このモンゴル文のテキスト転写・和訳・語註を提出する。

このモンゴル文は、合計14行・のべ54語と、量的には決して多くない。そのためか、管見の限り、これまでこのモンゴル文に注目した研究はない²⁾。しかし、従来知られているカラホト発現のモンゴル語文献の数はきわめて少ない。Козлов 将来のカラホト出土モンゴル語文献は計17件にのぼることをKotwiczが報告しているが[Cleaves 1955, pp.2-8]、そのうちテキスト転写・写真が研究発表されているのは契約文書1件[Cleaves 1955]と印刷された2断片[Munkuyev 1970]のみである³⁾。Stein 将来品では断片1件の写真が公刊されるのみで[Innermost Asia III, pl. CXXVI, K.K.i.03.f.]、テキスト転写などを発表した研究はない⁴⁾。これ以外には、わずかに1972~1976年の中国側の調査によって発掘された1件の写真が公表されるに過ぎない[陳炳應「黒城新出土的一批元代文書」『考古与文物』1983-1, pl.12.4]。上述した1983~1984年の中国側の調査で将来された非漢語文献も、編集・公刊が予定されているが、現時点では未刊である。いまだ本文書現物を実見せず、もっぱらHCWの写真のみに依拠する段階にもかかわらず、筆者があえてテキスト・和訳を提出する最大の理由は、上述のような史料状況を改善するためには、たとえ些小であっても、テキストの提出自体に意義があると考えからである。

また本文書は、標題にも掲げたように、おそらく公的な税糧納入簿の断片と考えられる。近年の研究により、モンゴル時代の文書行政においては、皇帝・皇族・諸王・将相により発行されたモンゴル語命令文書が、文書行政の上で絶大な権威を持ち法規制の根源となったことが明らかにされている[杉

山 1990; 中村・松川 1993; 松川 1995b]。しかし、文書行政の末端に至るまでのモンゴル語文書の利用状況については、未だ不明の点が多い。その点で、本文書は、カラホト・河西での税制関連文書行政において、モンゴル文・漢文合璧文書が使用されていたことを示すものであり、モンゴル期の文書行政の実態を歴史学的に解明する上で重要な史料となり得る。そこで本稿第2節では、本文書の歴史的背景の解明にむけての予備的作業として、本文書の性格・機能とその作成過程を、文書行政システムと関連させつつ考察する。

さらに本文書には、モンゴル語の度量衡(容量単位)である *šim* に関して、従来の知見を大きく改める貴重な情報が含まれている。時代・地域を問わず、歴史研究には度量衡に関する正確な知識が必要とされることはいうまでもない。そこで本稿第3節では、従来の知見を整理しつつ、本文書の解読によって新たに判明した点について報告する。

1. 概観・テキスト・和訳・語註

まず HCW [p.110] に従い、本文書についての古文書学的情報を整理・概観しておく。文書番号 F214:W1 のうち、F214 は発掘地点を示すが、亦集乃路総管府遺址内外のどの発掘地点を指すのかは、これまでの中国側の調査報告[『文物』1987-7, pp.1-23; HCW, p.84]では明らかではない。紙質は「竹紙」、紙寸法は縦 27.1 cm, 横 46.0 cm である。紙の厚さは不明。写真からみる限り、全体に横方向に細かい漉き縞があり、文書の上端・右端はほぼ完全と思われるが、左端および文書中央部より左側の下端は欠落。11.8-9 のあいだで文書が連貼されている。左端・右端ともに、さらに文書が貼り接がれ、卷子本となっていた可能性もある。公印らしいものはみえない。カラホト出土である以上、13~14 世紀=モンゴル時代に属することは疑いないが、厳密な年代判定は不可能である。

以下にモンゴル文のローマ字テキスト転写・和訳と漢文テキストの移録を

掲げ、続いて語註を提示する。テキスト転写・移録において、行数はモンゴル文・漢文を区別せず、モンゴル文の順序に従って左行から右行へと数える。そのため、漢文の順序はHCWの録文とは逆になる。ウイグル文字モンゴル文のテキスト転写はLigeti [1972a]の方式におおむね準拠し、また文字の欠落などについては以下の凡例による。

- テキスト: **Bold** テキスト破損のため欠落した文字を復元したもの。
 [.....] テキスト破損部分。
 Italic 一部が欠落、または不鮮明な文字(残画)を復元したもの。
 (.....) 残画はあるが復元できない文字の概数。
 和 訳: [] テキスト破損部分を復元した箇所。
 () 語句・文脈の解釈のための補足説明、言い替えなど。

テキスト

和訳

- | | | |
|-------------------|-----------------------------------|------------------|
| 1 | arban sara-yin (.)[.....] | 十月の[・・・日に] |
| 2 | 収石撒蘭伯小麦三石 <u>三斗</u> | |
| 3 | Si-Sarambai yurban tayar | 石サラムバイが3石 |
| 4 | yurban šim buydai tūsūrbe | 3斗の小麦を注入(=納入)した。 |
| 5 | arban sara-yin QWR(...) [.....] | 十月の□日 [に] |
| 6 | 収孛羅帖木小麦廿八石 | |
| 7 | Bolad-Temür qorin naiman tayar | ボラド=テムュルが28石の |
| 8 | buydai tūsūrbe | 小麦を注入(=納入)した。 |
| ----- (連貼部) ----- | | |
| 9 | arban nigen sara-yin arban sinete | 十一月初(旬)の十日 [に] |
| 10 | 収朶只失加小麦十一石九斗 | |
| 11 | Yaqoi-Dorjšikaba arban nigen | 也火ドルジシカバが11 |
| 12 | tayar jiryuyan šim buydai | 石6斗の小麦を |
| 13 | tūsūrbe | 注入(=納入)した。 |
| 14 | arban nigen sara-yin arban tabun- | 十一月の十五日 |

- 15 収朶只失加小麦一十六石七斗
 16 -a bi Yoqai-Dorjiskaba arban に、私、也火ドルジシカバが
 17 jiryuyan tayar doluyan šim buydai 16石7斗の小麦を
 18 tūsūrbe 注入(=納入)した。

語註

(2, 3) 石撒蘭伯 / Si-Sarambai : 「石」という漢語の姓に Sarambai / 撒欄伯という非漢語名をもつ人名。HCW は漢文を「石撒欄僧」と移録するが、モンゴル文との対応から「僧」は「伯」に訂正すべき。撒蘭伯という漢字音写は Y1:W64 [HCW, p.154 & pl.18 (3)] にも在証 (attest) される。また、カラホト出土モンゴル文契約文書 (G 106, l.20) で、Kotwicz が Sarambat / Saramba, Cleaves が Sarambaba と読んでいる人名 [Cleaves 1955, pp.8, 24, 44] も、末字を -Y とみて Sarambai とすべきであろう。

(2) 三石三斗 : 「三斗」は完全に欠落しているが、モンゴル文の yurban tayar yurban šim 「3石3斗」から補う。tayar = 石, šim = 斗の対応関係については本稿第3節を参照。

(4) buydai : 「小麦」。ウイグル語 buyday からの借用語である。古典期モンゴル語の正書法では buyudai との形式をとるが、本文書では buydai (ll.4, 8, 17), buyudai (l.12) と両様に書かれる。Franke [1970] が発表した藤井有鄰館所蔵モンゴル語文書 (後述) でも buydai と buyudai の両形式が現れる。

(4, 8, 13, 18) tūsūrbe : tūsūr- は「注ぐ」の意である [Kowalewski III, p.1911; Lessing, p.857]。この tūsūr- に関連して注目されるのは、トゥルファン出土のウイグル文書にも、やはり穀物の納入に関して qud- ~ quṭ- 「注ぐ」という表現がみられることである。以下にその在証例を列挙する。①・②は SUK の、⑥は Zieme [1975] のテキスト・翻訳にほぼ従った。③・④は現在 SPF に所蔵されており、すでに USp によって Radloff の独訳と Malov によるウイグル文字テキストが公刊されている。筆者は大阪大学に寄贈されている山田信夫

教授旧蔵の写真により USp のテキストを若干修正した。また⑤についてはベルリン＝ブランデンブルク科学アカデミー所蔵の現物を実見調査した。

① SUK Mi14 (= USp 126, ll.2-3): ačřy-qa qud-ar arpa kümüş

「御倉に注入 (= 納入) すべき大麦の (代価としての) 銀」

② SUK Mi15 (= USp 117, l.2): sang-qa quřyan üč küri yır

「御倉に注入 (= 納入) すべき 3 斗のキビ」

③ 3Kr.30b (= USp 119, ll.1-2):

1 [.....](..)[.] 'YY(..)L(..) inäči-ning tsang イネチが倉

2 [.....] qud'yu tarřy-tan 注ぐべき主穀のうち

④ 3Kr. 30c (= USp 121, ll.1-3)

1 [.....](..) inäči-ning tsang-qa quřyu [.....] イネチが倉に注ぐ [べき]

2 [.....](..) bilä iki řřy tarřy tägdı yana [.....] ... で 2 石の主穀が至った。また ...

3 [.....] iki küri tarřy tsang-qa quřđı P[.....] ... 2 斗の主穀を倉に注いだ。 ...

⑤ Ch/U 7327

1 [.....] küri birlä bir řřy iki küri sang-nı qočo-ta sang-qa qudzun

... 斗ますで, 1 石 2 斗の 倉糧を 高昌の 倉に 注げ。

⑥ U 5337 (ll.100-101, 108-109)

100 kārām-kā sang-qa qudsā tur- (小麦を) 穴蔵や倉に注ぐなら, 満杯

101 -qa taša turşun (中略) にあふれかえるように。(中略)

... (中略) ... (中略) ...

108 oru-qa qudar oylan-lar-nıng (小麦を) 穴蔵に注ぐ小姓たちの

109 udluq-ları yarılşun 腰骨が折れるように。

②～⑥にみえる uig. sang ~ tsang は chin. 倉 (LRP, p.45: E. ts^han; L. ts^han) の音写であり, ⑤の第一例⁵⁾を除き, いずれも「くら, 倉庫」を意味する [e.g. ED, p.555]。この sang ~ tsang に職掌接尾辞 +čï が接続した tsangčï は, USp 88 (=U 5317, l.40) には税布や田租 (uig. tintsui) を徴収する立場で登場していることから「収税吏, 徴税人」と考えられるので [cf. Zieme 1981, pp.245, 246, 253], sang ~ tsang も, その実態は税糧としての穀物を納入する公的倉庫であると思われる。②の sang を SUK 編者が「御倉」と訳す根拠もおそらく同じであろう。また①の ačřy の原義は「贈り物」であるが [ED, p.22], ②の sang との類

推から「御倉」とする SUK 編者の解釈に従う。これらの文書の性格については、①・②は公的倉庫への納入証明書ないし領収証と思われる[cf. 森安 1994, pp.78-79]。③・④はいわゆる「イネチ(イナンチ)文書」に属するもので、③は文書末尾の公印らしい捺印から穀物納入を命令する公文書と思われ[cf. 梅村 1987, pp.91-94 & n.37]、④は非常に断片的であるため文書の性格は明瞭でないが、やはり公的倉庫への納入に関わるものであることは疑いない。⑤も公印こそないが、文脈からはやはり公的な命令文書と考えられる。ただし、⑥は小麦の豊作を求める祈願文の一節であり、ここでの sang「倉」や kārām, oru「穴蔵」[cf. Zieme 1975, pp.133, 134] が公的なものとは断言できない。

とはいえ、これら①～⑥の uig. qud-~quṭ-「注ぐ」が、本文書の mong. tūsūr-と並行する表現であることは一目瞭然である。そこで、本文書の tūsūr-についても、①・②の qud-~quṭ- に対する SUK 編者の「注入(=納入)する」という訳を採用する。第2節で述べるように本文書が公的な税糧納入簿であることを考慮しつつ、さらに敷衍すれば、モンゴル時代の河西～東トルキスタンにおいて税糧としての穀物を官倉に納入する際には、「注ぐ、注入する」という表現を用いるのが一般的だったのかもしれない。この点についてはモンゴル語・ウイグル語に限らず、各言語の税制関連文書にみえる用語・文脈を幅広く検討する必要がある⁶⁾。

(5) QWR(...): γurban「3(日)」ないしは qorin「20(日)」であることは確実。qorin の後に数詞が接続していれば下旬(21～29日)となる。

(6, 7) Bolad-Temür / 孛羅帖木: 写真で見る限り、1.7 行頭の Bolad < BWL'D は語頭の B- 以外は不明瞭で、むしろ漢文から逆推せざるを得ない。孛羅は人名 Bolad の漢字音写として漢文史料中に頻出する。

(10, 11, 15, 16) Yaqoi-Dorjīsikaba ~ Yoqai-Dorjīsikaba / 朵只失加: Yaqoi-Dorjīsikaba (l.11) と Yoqai-Dorjīsikaba (l.16), そして漢文の朵只失加は、いずれも同一人物と思われる。何らかの理由から小麦を2回に分けて納入したのであろう。Yoqai は Yaqoi の誤記か。この Yaqoi ~ Yoqai は漢文に対応する語が

ないが、おそらく西夏語の姓である .a-xwa ~ ?a-xia か、もしくはその漢字音写とみられる複姓「也火」のウイグル文字表記であろう⁷⁾。也火は HCW 所収文書に頻出する複姓である。9~10世紀の河西方言における漢字音では jia₂-x^wa² (高田 1988, pp.308, 306) であるが、もし元代漢字音 je[~]-xwɔ[~] [LRP, pp.363, 123] に近づけようとすれば、1.11 の Yaqoi はモンゴル語の母音調和原則を無視して Yeqoi と表記できるかもしれない。原音が不明のため、和訳では便宜的に漢字音写の也火を採用する。なお、11.2-3 で Si-Sarambai / 石撒欄伯がモンゴル文・漢文ともに姓まで完全に記されているのに対し、本処の Yaqoi ~ Yoqai / 也火姓が漢文で省略された理由は説明できない。

第2の人名要素の Dorj^{is}ikaba が漢文の朶只失加に対応することは疑いない。前半部は語頭の T- 字を除いて 11.11, 16 とともに不明瞭であるが、漢文の朶只から頻出する人名要素 mong. Dorji (< tib. rDo rje) とみた。ただし、Dorji の漢字音写形式は、朶立只~朶児只~朶耳只~朶爾直~朶栗赤など、語中の -r/- 音をも表記するのが普通なので、本処の Dorji / 朶只はあくまでも暫定案である。後半の mong. sikaba は、おそらくチベット語人名要素 skyabs 「保護者」の借用・ウイグル文字表記であり、漢字音写の失加は sikaba の語末の -ba/ 音の音写を省略したものであろう。

(10, 12) jiryuyan šim / 九斗：本処ではモンゴル文・漢文が全く対応しない。モンゴル文の jiryuyan 「6」と読んだ部分を yisün 「9」と読むのは無理である。逆に漢文の「九」も明瞭であり、「六」と読むことは出来ない。

(16) bi：文脈からは B' > ba 「また、ふたたび」の可能性もあるが、11.11, 16 の Dorj^{is}ikaba の語末の -B' > -ba とは明らかに異なり、末字は -Y と読むべきである。

2. 本文書の性格・機能と作成過程

本文書が、石サラムバイ (11.1-4), ボラド=テミユル (11.5-8), 也火ドルジシカ

バ(II.9-13; 14-18)の3名が一定額の小麦を納入したことを、モンゴル文と漢文で記録した文書の断片であることは、前節で提示したテキスト・和訳をみれば明らかである。これらの小麦納入の目的と、モンゴル文・漢文両テキストの相互関係とを明らかにしておくことが、本文書の性格・機能の把握、ひいては歴史資料としての利用のための前提条件となる。この点に関連して、HCWは本文書を「錢糧類・賦税」の項に分類しつつ「在畏兀兒体蒙古文旁訳写漢文」と解説しているが、その根拠は示していない。そこで本節では、第一に、HCWの解説を再検証する。その上で、歴史的背景となる文書行政手続をも考慮しつつ、本文書の作成過程について検討する。

まず、本文書を「賦税」関連とするHCWの分類、つまり本文書に記録された小麦の納入が公的な税糧納入に関わることを再度確認したい。その上で重要なのは、漢文ではなくモンゴル文(II.1, 5, 9, 14)にのみ記された小麦納入の日付である。その記載によれば、小麦の納入はいずれも10~11月に行なわれている。これは『元典章』卷24・戸部10・租税・納税、「税糧違限官員科罪」の条に定められた税糧納入期間「初限十月終、中限十一月終、末限十二月終」に一致する。さらに、HCW[pp.183-185]所収文書においても、まず税糧納入命令書(F193:W13)では税糧納入期間が「初限十月終、末限十二月終」と定められており、そして納税者に対して発行された納税抄(税糧領収証)の発行日付も、確認できる限り、すべて10~12月である(F135:W71, F135:W72「十月卅日」; F105:W5「十二月廿一日」; F146:W9「十一月廿七日」; F97:W3「十一月」; F209:W29「十一月廿二日」)。これに対し、モンゴル期のカラホト出土穀物貸借契約文書で設定されている返済期限は、後述するモンゴル語文書(G 106, 1.20)では7月15日[Cleaves 1955, pp.24, 35], 漢文文書でも7~8月中である[HCW, pp.187-188, F125:W40「七月終」; F125:W37「八月終」; Y1:W87「八月」]。さらに、麹氏高昌国時代及び唐代の漢文契(トゥルフアン・敦煌出土)[仁井田 1937, p.267]や、10世紀以降のウイグル文(トゥルフアン出土)[護 1961, p.355; 山田 IV, pp.111-114; SUK Lo01-Lo30], 敦煌・カラホト出土

のチベット文 [Takeuchi 1995, pp.63-72, Text 18-25] および西夏文 [野村 1979b, p.101; 松澤 1988, p.125; 松澤 1996, p.9] の穀物貸借契約文書でも、やはり返済期限は7～8月である。つまり、この日付に着目することで、本文書に記録された小麦の納入は、私的な消費貸借ではなく、公的な税糧としての小麦納入に関連することが、より積極的に推測されるのである。

次に、本文書の漢文とモンゴル文との関係を検討しよう。写真を見れば、漢文は明らかにモンゴル文の行間に詰め込まれるように記入されている。従って、モンゴル文が漢文に先行して記入されたとする HCW の解説はやはり妥当である。文書現物を実見して墨の重なり具合などを調査すれば、確証を得られるであろう。

ただし注目すべきは、本文書の漢文がモンゴル文の単純な翻訳とはいえない点である。まず、上述したように、モンゴル文には記されている小麦の納入日付が漢文にはない。次に、モンゴル文 1.16 には bi「私」とみえることから、本文書 11.14-18 のモンゴル文は税糧納入者の也火ドルジシカバ自身が記述したと思われる。モンゴル文の書式が同一であることを考慮すれば、その他のモンゴル文も石サラムバイ・ボラド=テミユルら自身が記述した可能性がある。少なくとも、モンゴル文の *tüsürbe*「注入(=納入)した」が、彼ら納税者の立場で書かれていることは疑いない。一方、本文書漢文テキストにおいて、モンゴル文の *tüsürbe* < *tüsür*「注入(=納入)する」に対応する動詞が「収」であることも確実である。しかし、HCW [pp.183-185] 所収の納税抄では、「収」は「(官衙が税糧を)領収する、受け取る」方向で用いられている。つまり、本文書漢文の「収」は、石サラムバイ・ボラド=テミユル・也火ドルジシカバの各人から納入された税糧としての小麦を受領した側、具体的には亦集乃路の税糧納入担当官衙であった広積倉 [cf. HCW, p.23] の立場で記されたと考えられる。さらに、語註でも指摘したように、11.9-13 での也火ドルジシカバの小麦の納入額は、モンゴル文では「11 石 6 斗」、漢文では「11 石 9 斗」と異なっている。これは漢訳の際の単純な誤訳ではありえない。なぜな

ら、II.14-18 では *arban jiryuyan tayar* が「一十六石」と正確に訳されており、また本文書漢文の筆跡は同一人物のものと思われるからである。以上をまとめれば、本文書モンゴル文と漢文テキストとの相違の背景として、①ウイグル文字モンゴル文の筆写能力を有する納税者自身（あるいはその代筆者。それが税糧担当官衙＝広積倉の官僚・属吏である可能性もある）が、税糧としての小麦の納入を完了し、必要事項（納入日付・納税者名・税額）をウイグル文字モンゴル文で本文書に記載する、②次いで、広積倉の側で納税者名と税額のみが再度確認され漢字で記載される（この際に、II.9-13 での也火ドルジシカバの税額が訂正された）、という状況が想定される。

ここで問題となるのは、納税者名と税額のみが漢文で再度記入される理由である。筆者はその理由として、HCW [pp.184-185] 所収の納税抄との関連を推定する。なぜなら、これらの納税抄には、納税者名と税額のみを記入すればよいように、年月や広積倉の担当官（大使・付使・監支納）その他の必要事項があらかじめ印刷されているもの（F97:W3, F270:W6, F193:W13.2）が存在するからである。そこで、さきに想定した本文書の作成過程と納税抄の発行とを関連させれば、①税糧納入の原簿として本文書がモンゴル文で作成される、②広積倉の担当官は、原簿モンゴル文の記載通りに小麦現物が納入されているか否かを再確認・再計量した上で、あらかじめ印刷された納税抄に漢文で納税者名と税額のみを記入して納税者に発行し、同時に原簿となる本文書にも納税抄に記入した事項を漢文で記録する、③納税抄の発行をも含めて税糧納入手続きが完了したことを示すため、各納税者ごとの必要事項（II.1-4; 5-8; 9-13; 14-17, ただし本来は I.18 も含まれるべき）をまとめる形で墨勾が付される、という文書行政手続を復元できるであろう。なお、モンゴル文に見える納税日付が月日のみで記されていることは、本文書があくまで単年度ごとに作成されるものであったことを示している。つまり本文書は、作成後の一定期間は税糧納入の原簿として広積倉で保管されていたものの、複数年度にわたる会計作業に用いられることはなく、年度終了後には不要・反故紙と

なったと考えられる。

以上、本節では、本文書の性格・機能とその作成過程、ひいては本文書の歴史的背景をなすモンゴル時代のカラホト～河西における税制関連文書行政の一端について考察した。同時に本文書は、ウイグル文字モンゴル語を主として利用する農民がモンゴル期のカラホトに(おそらく広範に)存在し、公権力側も彼らの存在を前提としてモンゴル語・漢文文書による文書行政を行っていたことを明らかにするものである。ただし、本文書1例のみをもって、このような状況をモンゴル時代に普遍的なものとするのは時期尚早である。一方で、モンゴル文のみで記された税糧納入簿や納税抄が今後カラホト出土文献中に発見される可能性もあり、その際には、モンゴル語による文書行政やモンゴル語を利用する農民社会の状況についての考察を、より深化させることができるだろう。この点、1983～1984年の中国側の調査で将来されたカラホト出土非漢語文献が一刻も早く編集・公刊され、本文書との比較検討の機会が与えられることを期待する。また『元典章』・『通制條格』などの元代政書類にも、税糧徴収に関する実務上の規定が記録されている。これら編纂史料・出土文書の総合的考察は、将来の課題である。

3. 容量単位 šim について

本文書では、石サラムバイ・ボラド=テミュル・也火ドルジシカバの各人の税糧納入額が、モンゴル文と漢文でそれぞれ mong. *yurban tayar yurban šim* 「3 tayar 3 šim」/ chin. 三石(石サラムバイ)；qorin naiman tayar 「28 tayar」/ 廿八石(ボラド=テミュル)；arban nigen tayar jiryuyan šim 「11 tayar 6 šim」/ 十一石九斗，arban jiryuyan tayar doluyan šim 「16 tayar 7 šim」/ 一十六石七斗(以上、也火ドルジシカバ)と記されている。語註でも述べたように、石サラムバイの納入額は漢文では末尾が欠けており、また也火ドルジシカバの最初の納入額は mong. *jiryuyan* 「6」と chin. 九が対応しない。しかし、最後の例から、

モンゴル語の穀物計量単位 *tayar* が漢語の容量単位である「石」に、同じく *šim* が「斗」に対応することが判明する。

tayar は、元来は「容器、袋」を意味するテュルク語 [ED, p.471] からの借用語であり、モンゴル語においては原義の「袋」だけでなく、漢語の「石」に対応する容量単位をも意味するようになったことが知られている [Kowalewski III, p.1582; Lessing, p.764; cf. Cleaves 1949, pp.438-439; Cleaves 1955, pp.34-35; TMEN II, Nr.905]。しかし、Kowalewski や Lessing の辞書の記載はおそらく『五体清文鑑』に由来するものであり、そして『五体清文鑑』にみえる非漢語の度量衡は決して正確とはいえないので [堀 1978, p.61 & n.3], 13~14世紀の先古典期モンゴル語における *tayar* = 石の対応関係については若干の疑問が残っていた。本文書の対訳例はこの対応関係を確証するものである⁸⁾。

それにもまして重要なのは、モンゴル語 *šim* が、漢文で明白に「斗」と対訳されていることである。従来、この *šim* の語義については定説をみていなかった。以下、従来の見解をあらためて整理しておきたい。

モンゴル語 *šim* に関して初めて分析を加えたのは、Козлов 将来のカラホト出土モンゴル語契約文書 (G 106) を詳細に研究した Cleaves [1955] である。以下に、この G 106 文書中の冒頭部分を掲げよう。

- | | |
|--|--|
| 1 luu jil dörben sara-yin | 龍年四月の |
| 2 arban sinete ba šing-Quli | 初(旬の)十日に。私達シング=クリ, |
| 3 šing-Isinambu ba qoyayul-a buyudai | シング=イシナムブの私達2人 ⁹⁾ は、小麦が |
| 4 keregtei bolju Suu-Temür-eče yabuqu | 必要となり、スウ=テムルから、通行する |
| 5 temür-tü šim-iyer yurban tayar dolon | 鉄の縁取りのある <i>šim</i> で、3 <i>tayar</i> 7 |
| 6 šim buyudai ašiy ügei aysuju | <i>šim</i> の小麦を、利息なしで借り |
| 7 abuba (後略) | 受けた。(後略) |

11.4-6 に「通行する鉄の縁取りのある *šim* で 3 *tayar* 7 *šim* の小麦」とあり、*šim* という語が2回在証されている。このうち、Cleaves [1955, pp.30-32] は最初の *šim* に関して註記を加え、これは漢語の升 (LRP, p.281: Y. šin; L. šǐǎn) か

ら借用され、鼻音韻尾 *-ng/* が *-m/* に変化したものであって、容器としての「ます、升、斛」を意味するとした。しかしながら、小麦の計量単位として「3 tayar 7 šim」と後続する šim については、まったく言及していない。Cleaves はその一方で、「3 tayar 7 šim」の tayar については、これが「石」に相当することを Kowalewski の辞書の記載によりつつ注記しているから [Cleaves 1955, pp.34-35], tayar の下位に位置する šim が漢語の「斗」に相当することを当然予測していたであろう。にもかかわらず、穀量単位としての šim に言及しなかったのは、šim と斗 (LRP, p.81: Y. təw'; L. təw') との音韻上の相違を解決できなかったためと思われる。また、G 106 文書中の 3 tayar 7 šim は「3 石 (0 斗) 7 升」を示す可能性もあるので、Cleaves があえて šim = 斗の対応関係を提唱しなかったのも納得できる。

ところが、モンゴル時代史の根本史料である『聖武親征録』と『集史』の記事にも、šim と斗が対応する例が見出される。いずれも、①西暦 1211 年に始まるモンゴル軍の攻撃を受けた金朝皇帝 (宣宗) が、1214 年に一旦モンゴルと講和した後、皇太子・完顔福興・抹撚尽忠らを残して首都の中都 (現在の北京) から開封 (南京、汴梁) へと南遷したこと、②この際に、斡荅を首領とする^{***} 乂軍 (契丹族を中心とする金の遊牧系諸族混成軍団) が金朝に対して反乱を起し、中都を攻撃するとともにモンゴル側に通じたこと、③チンギス=カン (Činggis-qan) が乂軍の要請に応じて、部将サムカ=バートル (Samuqa-bayatur) と石抹ミンガン (明安 < mong. Mingyan ~ Ming'an) を派遣して乂軍とともに中都を包囲させたこと、④モンゴル軍の包囲により食糧難に陥った中都へ金の援軍が派遣されたこと、を伝えるものである¹⁰⁾。

A : 『聖武親征録』[王観堂先生全集12, 文華出版公司, pp.5229-5230]

[甲戌 (1214)] 五月、金の太子、[完顔] 福興・[抹撚] 秦忠^{***}を留めて中都を守らしめ、また汴梁^のに走る。上 (=チンギス)、契丹の衆 (=乂軍) のまきに来歸せんとするを以て、遂に散只兀兒^{サルジウト}の三木合拔都^{サムカバートル}に命じ、契丹の先鋒の將の[石抹]明安^{ミンガン}太保兄弟^{***}を領して郷導と爲し、我が軍を引きてこれに合せしむ。至りて、則ち斡荅

らと力を並べて中都を圍む。金主、^マ檢點の[烏古論]慶壽・元帥の李英を以て糧を運び分道して還りて中都を救わしめ、人ごとに糧三斗を齎らしめんとす。

B:『集史』チンギス=カン紀 [JT-TS, 97a/11-19; cf. JT-RM I, pp.452-453]

金帝 (Altān-ḡān) が、自分の息子を、アミールの福興 (Fūkīnk) ・尽忠 (Sīnjūnk) とともに中都城 (šahr-i Jūnkūdū) の守護のために残してしまってから5ヶ月間の後、[その]息子 (JT-TS: BŠHR; JT-RM: pisar) は城市をアミールたちに残し、父のもとへ[すなわち]南京 (Nāmkīnk) へと出発した。そして、チンギス=カン (Jīnkkīz-ḡān) は、サルジウト族 (aqvām-i Sāljiūt) 出身のサムカ=バートル (Sāmūqa-bahādūr) と、すでに帰服して (īl šūda būd) 信頼されていた女真族 (qau-m-i Jūrja) 出身のミンガン (Mīnk-an) を、中都の境域 (ḡudūd-i Jūnkūdū) を通過して、金帝から逃走して中都城から使者を派遣していたカラキタイ人の軍隊 (laškār-i Qarā-ḡitāy) とその地にいた軍隊を越えさせる? (baguzārānand) ために、モンゴル人からなる軍隊とともに派遣した。彼らは出発してその軍隊と合流し、それから一緒になって中都城を包囲した。金帝は、かねてから、そしていまでも、中都城にはタガル (taḡār) すなわち軍隊や人々のための糧食 (qūt) が無いことを聞いていたので、元帥 (yūnkšāy < mong. ōnšai < chin. 元帥) という万人隊のアミールを、その名を慶寿 (Kūnk-sū), 第2の? (JT-TS: DVM > duvum (?); JT-RM: radīm) カム=シャイ (Kām-šāy), リ=フィング (Li Fīnk < chin. 李英?) という他の3人のアミールとともに派遣して、中都城へタガルすなわち糧食 (ḡūrīš) を運び届けるため各人ごとに3 qafiz — キタイ (ḡitāy) の言語ではそれを sīm (SYM) という — を運ぶように命令した (yāsāq kard)。

チンギスの事績に関する『聖武親征録』と『集史』の記事が、多くの点で共通していることは周知の通りである。上掲史料A・Bも、石抹ミンガンの出自部族や、金帝が中都救援のために派遣した部将名など、個々の事実関係に若干の混乱が見られるが、やはり記述内容はほぼ同じと言ってよい。

ここで注目すべきは、『聖武親征録』の「三斗」¹¹⁾の部分が、『集史』ではイスラーム圏の計量単位である qafiz を用いて3 qafiz と記され、そしてその qafiz に「キタイの言語では sīm という」との説明が加えられていることである。これについて、まず Смирнова [1952, p.173] は『集史』の sīm を「キタイの言語」すなわち漢語とし、その原語を「升」とみなしつつも、兵士1人につき「三升」では中都の糧食不足を救援するには少なすぎるので、歴史的事実と

しては『聖武親征録』の「三斗」のほうが正確であり、『集史』の *šim* は何らかの誤記であると考えた。また Doerfer [TMEN III, pp.313-314, Nr.1317] も、升と *qafiz* との容量の差異に苦慮しつつも、結局は疑問符つきで『集史』の *šim* を漢語の「升」の音写とみなしている。

これに対し、Ligeti [1968, p.123] は、『集史』にみえる *šim* を、「升」の音写ではなくモンゴル語 *šim* の音写であり、そしてモンゴル語 *šim* は漢語の「斗」に相当することを、はじめて明瞭に主張した。Ligeti の論拠は、明初期に編纂された『華夷訳語』の蒙漢対訳語彙集(韃靼館雑字)において、漢語の「斗」に対応するモンゴル語がウイグル文字で *SYM > šim* と書かれ、漢字で「参」(LRP, p.280: Y. *šam*) と音写されていることである¹²⁾。Ligeti は見落としているが、『華夷訳語』に先立って元代に編纂された『至元訳語(蒙古訳語)』においても、漢語の「斛(=斗)」に対応するモンゴル語が「深」(LRP, p.280: Y. *šim*) と漢字音写されており、これも *šim* と再構できることも、Ligeti 説を補強する[cf. 石田 1934, p.100, No.160; 長田 1953; Ligeti & Kara 1990, p.267; Kara 1990, p.323]。さらに、前掲『集史』記事中で *šim* に対応させられている *qafiz* の値は、『集史』が編纂された 13~14 世紀のイランでは重量単位として約 10 kg, ホラズム(Hvārizm) 地方では容量単位として約 10 リットルに相当するといひ[Hinz 1955, p.49], これも升よりは斗(宋元では約 9.5 リットル)に近似する。

以上の『聖武親征録』・『集史』・『華夷訳語』・『至元訳語(蒙古訳語)』の例と、前引のモンゴル語契約文書 G 106 中の *šim* とを併せ考えれば、Ligeti 説はますます説得的となろう。ただし、おそらく *šim* と斗の音韻上の相違がやはり説明できず、Cleaves が提案した升 > *šim* という借用関係に反論できなかったためか、Ligeti は G 106 文書の *šim* には言及しない。さらに、『至元訳語(蒙古訳語)』の *šim > 深/斛* は軍器門、Ligeti の言及した『華夷訳語』の *šim* /斗は器用門に挙げられていることをより厳密に解釈すれば、これらの *šim* /斗はあくまでも容器としての「ます、斗ます」であって、容量単位ではない可能性もあった。

しかしながら、Franke [1970] によって、šim が tayar とともに穀量単位として在証されるもう 1 件のモンゴル語文書が、写真とともに発表された。この文書は現在、京都の藤井有鄰館に所蔵されており、おそらく敦煌を中心とする河西地方から将来されたものと思われる¹³⁾。既発表の写真では解読困難な箇所もあるが、以下に Franke の読みを一部訂正しつつ、tayar と šim の在証部分を掲げよう。

- 2 došin erbei sirbusun-u W(....)M sang-un tayar-iyar dörben
40 ? の弦の 倉の 袋で 4
- 3 tayar yurban jarim šim buyudai kürelyetü? büllege dutaquin
tayar 3.5 šim の小麦を集めて? いた。不足している分を
- 4 šimbesü? tariyan sang-un šim-iyar qoyar tayar yisün šim buydai
計量して? 穀 倉の ますで 2 tayar 9 šim の小麦を
- 5 ögüküi (後略)
与える。(後略)

この文書でも、tayar, šim は、sang-un tayar「倉の袋」(1.2), tariyan sang-un šim「穀倉のます」(1.4)のような容器としての用例以外に、4 tayar 3.5 šim (11.2-3), 2 tayar 9 šim (1.4) と、小麦の計量単位としても在証される。Franke [1970, p.140] はこれらの šim について、前述の Ligeti [1968] 説には言及せず、『五体清文鑑』の記事を引用しつつ Cleaves [1955] 説を支持して「升」の借用語とみなす。しかし、『五体清文鑑』の記事が必ずしも信頼できないことは前述したとおりである。また、もし穀物計量単位の šim が「升」に相当するとすれば、G 106 とあわせてモンゴル語文書 2 件・計 3 カ所の在証例は、「3 石 (0 斗) 7 升」「4 石 (0 斗) 3.5 升」「2 石 (0 斗) 9 升」と、いずれも斗の桁が 0 になり、きわめて不自然である。Franke [1970, p.140] も指摘するとおり、少なくとも、šim が tayar に次ぐ単位であることは疑いない。そして tayar が容量単位「石」に対応する以上、šim は「石」に次ぐ「斗」に対応することになる。

つまり、šim と斗との音韻上の相違をひとまずおき、既知の編纂史料・出

土文献の在証例を虚心に眺めるだけでも、容量単位としてのモンゴル語 *šim* が漢語の「斗」に対応することは十分に予想されるのである。そして、本蒙漢合璧文書での完全な対訳在証例の出現により、容量単位としての *šim* = 斗の対応関係には、もはや一点の疑問もなくなった。前節で述べたように、本文書は公的な税糧納入簿であるから、この対応関係はモンゴル時代の度量衡制度において確立されていたと考えられる。なお、Ligeti, Kara 以外の先学は *šim* を *sim* と転写してきたが、SPF 所蔵のカラホト出土モンゴル語契約文書 G 109 (未発表、註 3 参照) には、語頭の S に 2 点がついた形式 *šim* で在証されるので、語頭は *ʃ*-音であったとみなすべきであろう。

しかし、先学を悩ませてきた *šim* と斗との音韻上の相違は、解決を要する問題として残っている。元来、体系的な度量衡とりわけ農産物・穀物に関する計量単位は、モンゴルが中国本土・イラン・東西トルキスタンのオアシス諸都市など定住農耕地帯を恒常的に支配する必要が生じた結果、これらの被征服地域からモンゴルに借用・導入されたものと思われる。ところが、管見の限りでは、モンゴル語以外の諸言語中の「斗」に対応する容量単位を示す語で、*šim* に音韻的に近接するものはなく¹⁴⁾、*šim* の語源として適当な語は漢語の升以外にみあたらない。さきの *šim* = 斗という結論とこれとを矛盾なく解決しようとするれば、モンゴル人は容器としての「ます、杓」の意の升を借用して *šim* と呼び、それが後に「斗ます」をも意味するようになり、さらに容量単位としての斗をも表わすことになった、とも考えられる。しかし、『至元訳語(蒙古訳語)』軍器門では「升」に対応するモンゴル語は説于深と音写されており[石田 1934, p.100, No.159]、いわゆる丙種本『華夷訳語』器用門にも mong. 升子深 / chin. 升斗 [石田 1944, p.190, No.789] という対訳例がみえる。さらに、Ligeti の依拠した『華夷訳語』でも、*šim* / 斗に続いて mong. SYNKSY > *šingsi* が升子と漢字音写され、漢語の「升」に対訳されている [Ligeti 1968, p.123; 賈・朱 1990, p.79, No.73]。おそらく『至元訳語(蒙古訳語)』の説于深の「于」は「子」の誤りであり、これと丙種本『華夷訳語』の升子深とは、「斗

ます」の意の深く *šim* に、「升」を表わす説子～升子／*šingsi* を加えて「升ます」を意味させたものに相違ない¹⁵⁾。つまり、モンゴル語 *šim* の原義はあくまでも「斗；斗ます」であって「升；升ます」ではないのである。

そこで筆者は、一案として、「斗」の字形に注目してみたい。トゥルフアン・敦煌出土の漢文文書においては、容量単位「斗」が「升」と記され、その場合「升」は1点を付して「𣪠」と書かれる例が頻出する¹⁶⁾。このような「斗」の異体字または別体字としての「𣪠」を、13世紀以降のモンゴル人が *šing* > *šim* と発音しつつ容量単位「斗」あるいは容器としての「斗ます」として受容した、と推測すれば、*šim*／斗の音韻上の不一致はひとまず解決できる。ただし、トゥルフアン・敦煌の漢文文書と我々の *šim* との間には、いかに少なくとも200年前後の時代差があるので、現時点ではまったくの憶測である。

本稿では、容量単位としての *šim* と斗との対応関係が確証されたことを報告するにとどめ、*šim* の語源と借用経路の最終的解明は今後の研究にまっこととしたい。

おわりに

本稿では、まず標題の蒙漢合璧文書のモンゴル文のテキスト・和訳・語註を提出した。次に、モンゴル文・漢文両テキストの分析を通じて、本文書が公的な税糧納入簿であることを論証し、かつ文書の作成過程について、納税抄(税糧領収証)などとも関連させて考察した。さらに、従来不明であったモンゴル語の穀物計量単位 *šim* と漢語の「斗」との対応関係が、本文書解読の結果得られた対訳在証例から判明することを報告した。

ただし本稿では、あくまでも本文書を歴史資料として利用するための基礎的作業にとどまり、文献学的にも歴史学的にも、多くの問題点を未解決のまま提示せざるを得なかった。行論中に示したような様々な課題を一つ一つ解決していくことを、果たすべき責めとしたい。

註

- 1) HCW 所収の各文書に加えられた注記によって知ることができる。ただし、HCW で写真が公開されているのは、本稿で扱う文書を除いては、漢文文書末尾の1~2行の「添書」のみであり [cf. 松川 1995a, p.112], まとまった情報量を有するモンゴル文との合璧文書の写真は未公開である。
- 2) 遺憾ながら、方齡貴「読『黒城出土文書』劄記」(『内蒙古社会科学』1994-6, pp.140-152)を参照し得なかった。
- 3) なお、В.Л. Успенский・松川節・中村淳の3氏と筆者の4名は、SPFに所蔵されるКозлов 将来カラホト出土モンゴル語文献についての共同研究を準備中である。
- 4) Stein 将来のカラホト出土ウイグル語・モンゴル語文献は、Le Coq [Innermost Asia II, p.1049]によって概説されている。ただし Le Coq は、写真が公開されている問題の断片 K.K.i.03.fについては、“in cursive Uighur characters”と説明するのみでモンゴル語とは断言していない。従って、Le Coq が「ウイグル語 (Turki)」と明言せず、単に“Uighur”または“Uighur document”とするもの (K.K.0140.c.; K.K.ii.269.b.; K.K.v-vi.010.)については、モンゴル語文献である可能性もある。
- 5) ⑤の第一例は、bir sīy iki kūri「1石2斗」との数量記載を伴っており、「くら、倉庫」ではなく明らかに穀物現物を意味している。中華地域の蒙漢合璧碑文では、やはり chin. 倉に由来する sang (パクバ字では cañ) が mong. amu「食糧」とともに漢文で「倉糧」と対訳されて頻出する [cf. 中村・松川 1993, pp.76-77]。⑤の第一例を「倉糧」と訳したのは、この sang amu と関連させたことによる。次註も参照せよ。
- 6) 中華地域には、モンゴル権力が寺観に免税特権を付与するために発令したモンゴル語命令文が、蒙漢合璧碑文として多数現存している。これらの命令文中には、mong. čidqu-「注ぐ」[Kowalewski III, p.2158; Lessing, p.177]の在証例があるが、その場合は税糧納入ではなく、寺観を官の倉庫代わりにする意で用いられている。少林寺聖旨碑第1載, ll.18-19: qan-u sang amu buu čidqutuyai「お上の倉糧は注ぐな」/漢文 (l.16): 倉粮休頓放者; 少林寺聖旨碑第2載, l.22: q-anu sang amu buu čidqutuyai「お上の倉糧は注ぐな」/ (l.16): 倉粮休頓放者 [以上, 中村・松川 1993, pp.34-48]; 至元17年 (1280)? 盤屋重陽万寿宮クビライ聖旨碑, ll.19-20: qa-nu c'añ "amu bu čid-qu-t'u-qayi「お上の倉糧は注ぐな」/休頓放官粮者 [Haenisch 1940, Tafeln 3, 4; Ligeti 1972b, p.27; 照那斯図 1991, pp.21-27]。
- 7) 西夏姓 .a-xwa ~ ?a-xia は、天盛22年 (1170) 土地売買契約文書 [Кычанов 1974; 野村 1979a]・光定元年 (1211) 穀物貸借契約文書 [Кычанов 1977; 野村 1979b]・天理図書館蔵夏漢合璧穀物貸借契約文書 [松澤 1988] の3件に在証されている。Кычанов [1974, p.198-199] は .a-xwa ~ ?a-xia をウイグル人ないしソグド人の姓とするが、従えない。また、Stein 将来の天慶11年 (1204) 穀物貸借文書 [Maspero, pp.193-194 & pl.XXXVI, No.474, a.iii]には借主として夜賀尼という人物がみえる。この夜賀 (LRP, pp.364, 135: Y. je`-xə) も、也火と同じく .a-xwa ~ ?a-xia 姓の漢字音写であろう。
- 8) なお、モンゴル支配下のイランでは 100 タブリーズ=マン (mann) = 83.4 kg に相当する重量単位として用いられており、これは穀物1石の重量に近似している。ま

- た「袋」の原義から転じて「軍糧・糧食」の意でも用いられた [Hinz 1955, p.52; 本田 1961, pp.292-293; 本田 1972, p.339. さらに本文で後述する「集史」記事も参照]。
- 9) qoyayul-a「2人で, 2人して」については, cf. Poppe 1974, p.55. これを Cleaves [1955, pp.12, 29] が Sočqul-a と読み, シング=クリ・シング=イシナムブとともに借主の人名とみなしたのは誤解である。ウイグル語契約文書でも, 契約の動機を述べる文脈で「私達, <人名>と<人名>の私達2人 (ikägü) に, . . . が必要となって」と記される例は頻出する [護 1961, pp.345-354; 山田 III, p.38; 山田 IV, p.105; SUK Sa03, Sa06, Sa08, Sa14, Sa28, Lo12]。
- 10) 「元史」巻1太祖本紀・太祖9年甲戌(1214)夏五月~10年乙亥(1215)三月の条, 「元史」巻150石抹明安伝, 「金史」巻101承暉(=福興)伝・抹然尽忠伝も参照。
- 11) 那珂通世「校正増注元親征録」「那珂通世遺書」(大日本図書, 1912) p.88 では「聖武親征録」の「三斗」を「八斗」とするが, 誤りであろう。
- 12) Ligeti が依拠したと思われる仏国アジア協会蔵「華夷訳語」(韃靼館雑字)抄本は, 賈・朱 [1990, pp.76-93] により公刊された北京図書館蔵抄本と同一系統であることが, 蔵書印から判明する。また, いわゆる乙種本系統に属する柯劭忞旧蔵の明抄本とも同一系統であろう [石田 1944, pp.157-158]。sim / 斗 が在証されるのは, 「尊益閣」という蔵書印が捺された葉から始まる「統増華夷訳語」の「器用門」である [cf. 賈・朱 1990, p.79, No.72]。なお, 石田 [1944] の扱ったいわゆる丙種本「韃靼館雑字」には, この sim / 斗 はみえない。
- 13) Franke [1970, p.138] はやはり藤井有鄰館に所蔵されるもう1件のモンゴル語書簡とともに本文書をトゥルフアン盆地出土と考えた。Ligeti [1972a, pp.235-236] も Franke に従ってこの2件を“Documents de Turkestan”に分類している。しかし, このモンゴル語書簡 [Franke 1965] の宛先は, 14世紀後半に沙州=敦煌を本拠としていた西寧王スルタン=シャー (Sultanš-a < Sultān-sāh) であり [杉山 1982, pp.27-38; 杉山 1983, pp.687-689 & n.85], 下書きでなく実際に発送されたのであれば, この書簡は敦煌ないしその近辺から将来されたものに相違ない。とすれば, 本文書も同じく河西地方将来である可能性が高い。さらに, 藤井有鄰館所蔵のウイグル語文献がいずれも敦煌出土であること [百済 1982, pp.21-22] も考慮すべきである。
- 14) ウイグル語にはやはり漢語「升」から借用された šing があるが, これはモンゴル期でも「升」に対応する [Yamada XII, p.493; 森安 1991, pp.55, 81]。
- 15) カルムイク方言の šindzi「升」[cf. Cleaves 1955, pp.30-31] も, この šingsi に関連するものであろう。なお, Kara [1990, p.329] は「至元訳語(蒙古訳語)」の説于深を「脱于深」の誤りとみなし, 「脱于」を漢語の「斗」に音韻的に関連させようとするが, 従えない。
- 16) 例えば, Pelliot 将来敦煌文書では算書(P 2667r:「敦煌宝蔵」第123冊, 新文豊出版公司, pp.198, 200-201), Stein 将来敦煌文書では西魏大統13年(547)瓜州帳籍(S 613), 某寺諸色斛斗破歴(S 1733), 麦粟布破歴(S 2228), 某寺月計諸色糧物破歴(S 3920v), 悲濟花等僧尼得餽歴(S 4192), 大谷探検隊将来トゥルフアン文書では唐儀鳳2年(677)北館文書(Ot.Ry.1422, 2842)などに「斗」の異体字・別体字としての「升」がみえる。

Stein 将来文書については『英藏敦煌文献(漢文仏經以外部分)』1-10(四川人民出版社, 1990-1995), 大谷文書については小田義久(編)『大谷文書集成』1-2(宝蔵館, 1984-1990)の図版を参照。このような「斗」と「升」との混同は、『隋書』西突厥伝などの編纂史料にも見られる[e.g. 佐口透・山田信夫・護雅夫(訳注)『騎馬民族史2・正史北狄伝』(東洋文庫 223) 平凡社, 1972, pp.201-202]。

参考文献・略号表(A B C順)

AOH: *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*. Budapest.

Cleaves, F.W. 1949: The Mongolian Names and Terms in the History of the Nation of the Archers by Grigor of Akanc'. HJAS 12, pp.400-443.

——— 1955: An Early Mongolian Loan Contract from Qara Qoto. HJAS 18, pp.1-49, +4 pls.

E.: Early Middle Chinese. See LRP, Introduction. (西暦600年前後の長安における漢字音)

ED: G. Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth Century Turkic*. Oxford, 1972.

Franke, H. 1965: A 14th Century Mongolian Letter Fragment. *Asia Major* (n.s.) 11-2, pp.120-127, +1 pl.

——— 1970: Zwei mongolische Textfragmente aus Zentralasien. In: L. Ligeti (ed.), *Mongolian Studies*, Budapest, pp.137-147, -2 pls.

Haenisch, E. 1940: *Steuergerechsamkeit der chinesischen Klöster unter der Mongolenherrschaft*. Leipzig.

HCW: 李逸友(編著)『黑城出土文書(漢文文書卷)』科学出版社, 1991.

Hinz, W. 1955: *Islamische Masse und Gewichte*. (Handbuch der Orientalistik, Ergänzungsband 1, Heft 1) Leiden.

HJAS: *Harvard Journal of Asiatic Studies*. Cambridge (Mass.).

本田 實信 1961: 「ガザン・ハンの税制改革」『モンゴル時代史研究』東京大学出版会, 1991, pp.261-323. (原載: 『北海道大学文学部紀要』10)

——— 1972: 「ガザン・ハンの度量衡統一」『モンゴル時代史研究』東京大学出版会, 1991, pp.333-341. (原載: 『山本博士還暦記念東洋史論叢』山川出版社)

堀 直 1978: 「18~20世紀, ウィグル族の度量衡について」『大手前女子大学論集』12, pp.57-67.

Innermost Asia. Detailed Report of Explorations in Central Asia, Kan-su and Eastern Iran, I-III. Ed. by M.A. Stein, Oxford, 1928.

石田 幹之助 1934: 「『至元訳語』に就いて」『東亜文化史叢考』東洋文庫, 1973, pp.87-111. (原載: 『東洋学叢編』1)

——— 1944: 「所謂三種本『華夷訳語』の『韃靼館訳語』」『東亜文化史叢考』東洋文庫, 1973, pp.147-205. (原載: 『北亞細亞学報』2 (1943))

賈 敬顔・朱 鳳 1990: 『蒙古訳語・女真訳語匯編』天津古籍出版社。

JT: Rašīd al-Dīn Faḡl-Allāh Hamadānī, *Jāmi' al-Tavāriḡ*, MS. İstanbul, Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, Revan 1518 (JT-TS); Ed. by Muḥammad Raušan & Muṣṭafā Mūsavī, I-IV, Tehrān 1373 / 1994 (JT-RM).

- 照那斯图 (Junast) 1991: 「八思巴字和蒙古語文獻・Ⅱ・文獻匯集」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- Kara, G. 1990: *Zhiyuan Yiyu: Index alphabétique des mots mongols*. AOH 64, pp.279-344.
- Kowalewski, J. É.: *Dictionnaire mongol-russe-français*, I-III. Kazan, 1844-49.
- 百濟 康義 1982: 「ウイグル訳『阿毘達磨純正理論』抄本」『仏教学研究』38, pp.1-25.
- Кычанов, Е.И. 1974: Тангутский документ 1170 г. о продаже земли. *Письменные Памятники Востока, Ежегодник 1971*, pp.193-203, 553 (pl.).
- 1977: Тангутский документ о займе под залог из Хара-хото. *Письменные Памятники Востока, Ежегодник 1972*, pp.146-152, 311 (pl.).
- L.: Late Middle Chinese. See LRP, Introduction. (唐中葉～末期の長安方言の漢字音)
- Lessing, F. D.: *Mongolian-English Dictionary*. Berkeley / Los Angeles, 1960.
- Ligeti, L. 1968: Review of TMEN II. AOH 21, pp.119-130.
- 1972a: *Monuments préclassiques I: XIII^e et XIV^e siècles*. (Monumenta Linguae Mongolicae Collecta II) Budapest.
- 1972b: *Monuments en écriture 'Phags-pa: Pièces de chancellerie en transcription chinoise*. (Monumenta Linguae Mongolicae Collecta III) Budapest.
- Ligeti, L. & Kara, G. 1990: Un vocabulaire sino-mongol des Yuan: *Le Tche-yuan Yi-yu*. AOH 64, 1990, pp.259-277, +19 pls.
- LRP: E.G. Pulleyblank, *Lexicon of Reconstructed Pronunciation in Early Middle Chinese, Late Middle Chinese and Early Mandarin*. Vancouver, 1991.
- Maspero, H.: *Les documents chinois de la troisième expédition de Sir Aurel Stein en Asie Centrale*. London, 1953.
- 松川 節 1995a: (評) D. Cerensodnom & M. Taube, *Die Mongolica der Berliner Turfan-sammlung*. 『東洋史研究』54-1, pp.105-122.
- 1995b: 「大元ウルス命令文の書式」『待兼山論叢 (史学篇)』29, pp.25-52.
- 松澤 博 1988: 「西夏文・穀物貸借文書私見」『東洋史苑』30/31, pp.121-140, -1 pl.
- 1996: 「西夏文・穀物貸借文書私見 (3)」『東洋史苑』46, pp.1-24, -5 pls.
- 護 雅夫 1961: 「ウイグル文消費貸借文書」『古代トルコ民族史研究』III, 山川出版社, 1997, pp.337-405. (原載: 『西域文化研究』4, 法蔵館)
- 森安 孝夫 1991: 「ウイグル=マニ教史の研究」『大阪大学文学部紀要』31/32, 1991.
- 1994: ウイグル文書簡記 (その四) 『内陸アジア言語の研究』9, pp.63-94.
- Munkuyev, N.Ts. 1970: Two Mongolian Printed Fragments from Khara-khoto. In: L. Ligeti (ed.), *Mongolian Studies*, Budapest, pp.341-357.
- 中村 淳・松川 節 1993: 「新發現の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」『内陸アジア言語の研究』8, pp.1-93, +pls.I-VIII.
- 仁井田 陞 1937: 「唐宋法律文書の研究」東方文化学院東京研究所。
- 野村 (松澤) 博 1979a: 「西夏文・土地売買文書の書式 (1)」『東洋史苑』14, pp.23-50.
- 1979b: 「西夏文・穀物貸借文書」『龍谷史壇』77, pp.98-108.
- 長田 夏樹 1953: 「元代の中・蒙対訳語彙」『至元訳語』『神戸外大論叢』4-2/3, pp.91-118.

- Poppe, N. 1974: *Grammar of Written Mongolian* (3rd ed.). Wiesbaden.
- Смирнова, О. 1952: (т.) Рашид ад-Дин, *Сборник Летописей*, том I, книга 2. Москва / Ленинград.
- SPF: Санкт-Петербургский Филиал Института Востоковедения Русской Академии Наук. (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルグ支部)
- 杉山 正明 1982: 「國王チュベイとその系譜」『史林』65-1, pp.1-40.
- 1983: 「ふたつのチャガタイ家」小野和子(編)『明清時代の政治と社会』京都大学人文科学研究所, pp.651-700.
- 1990: 「蒙漢合璧命令文の研究(一)」『内陸アジア言語の研究』5, pp.1-31, +2 pls.
- SUK: 山田信夫(著) 小田寿典 &c.(編)『ウイグル文契約文書集成 (*Sammlung uigurischer Kontrakte*)』1-3. 大阪大学出版会, 1993.
- 高田 時雄 1988: 「敦煌資料による中国語史の研究」創文社。
- Takeuchi, T. 1995: *Old Tibetan Contracts from Central Asia*. Tokyo.
- TMEN: G. Doerfer, *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen*, I-IV. Wiesbaden, 1963-75.
- 梅村 坦 1987: 「イナンチ一族とトゥルファン=ウイグル人の社会」『東洋史研究』45-4, pp.90-120.
- USP: W.W. Radloff, *Uigurische Sprachdenkmäler*. Leningrad, 1928.
- Y.: Early Mandarin. See LRP, Introduction. (元代漢字音)
- 山田 信夫 III: 「ウイグル文売買契約書の書式」『西域文化研究』6, 法蔵館, 1963, pp.29-62, +1 pl. (Rep. in SUK 1, III)
- IV: 「ウイグル文貸借契約書の書式」『大阪大学文学部紀要』11, 1965, pp.87-216, +6 pls. (Rep. in SUK 1, IV)
- Yamada, N. XII: Four Notes on Several Names for Weights and Measures in Uighur Documents. In: L. Ligeti (ed.), *Studia Turcica*, Budapest, 1971, pp.491-498. (Rep. in SUK 1, XII)
- Zieme, P. 1975: Ein uigurischer Erntesege. *Altorientalische Forschungen* 3, 1975, pp.109-143, +Taf. 19-20.
- 1981: Uigurische Steuerbefreiungsurkunden für buddhistische Klöster. *Altorientalische Forschungen* 8, pp.237-263, +Taf. XIX-XXII.
- 付記 本稿は平成9年度文部省科学研究費補助金(国際学術研究および特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

(大学院後期課程学生)

图版拾柒



(1) F214:W1

F214: W1 (HCW, pl.17 (1) より複製)